

---

---

## フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

ーリクールのフロイト解釈における主体の検討のための予備考察

後藤悠帆

京都大学大学院 教育学研究科 臨床教育学講座 修士二年  
yuh.ake0@gmail.com

**要旨** 本稿は、フロイト精神分析の第一局所論における「無意識」概念の特徴を明らかにする論稿である。この作業を通じて、フロイト思想における主体と意識、および無意識との連関を検討するための予備考察を行いたい。第一に、フロイトの無意識概念の構築過程に見出される特徴を整理する。第二に、メタサイコロジー的叙述を検討し、フロイトの無意識概念は非記述的な仕方であつ、力動論、局所論、経済論にもとづいて構築されることを示す。無意識の内実は、〈力〉としての欲動のエネルギーであると同時に、〈意味〉としての表象の網状組織でもあることを明らかにし、この無意識における〈力〉と〈意味〉の一致を可能にするのが、欲動の〈代表〉の機能であることを示す。第三に、リクールのフロイト解釈を参照して、フロイトの無意識を経験的および構成的な実在性と捉え、無意識の受容により、フロイトに批判された直接意識は解釈学的意識へと転化することを示す。

**キーワード**：メタサイコロジー、無意識、〈力〉と〈意味〉、欲動の心的代表、解釈学的意識

## Investigation of the concept of “unconscious” in S. Freud’s psychoanalysis of the first topography

-Preliminary consideration to investigate the subject in P. Ricœur’s interpretation of S. Freud

**Yuhō Goto**

Kyoto University, Graduate School of Education, Specialize in Clinical Pedagogy,  
The second year of master’s course

**English Abstract:** The purpose of this paper is to clarify characteristics of the concept of “unconscious” in S. Freud’s psychoanalysis of the first topography, and also to considerate preliminarily the relation between subject and consciousness and unconscious. First, this paper will investigate characteristics constituting the concept of unconscious. Second, I will examine metapsychological presentation, and reveal that Freud’s concept of unconscious is constituted not by means of descriptive but based on dynamic, topographical and economic aspects. The contents of unconscious is not only energy of instincts as “force” but also a ramified network of ideas as “meaning”, and the function of representative of instincts make possible to connect “force” and “meaning” in unconscious. Third, I will define the Freud’s unconscious as empirical and constitutive reality, by referring Paul Ricœur’s interpretation of Freud, and argue that immediate consciousness which is strongly criticized by Freud transform the hermeneutic consciousness by accepting Freud’s unconscious.

**Keywords:** Metapsychology、 Unconscious、 “force” and “meaning”、 Psychic representative of instinct、 Hermeneutic consciousness

## 1. 問題の所在

本稿は、S・フロイト（Sigmund Freud 1856-1939）が創始した精神分析における「無意識（Unbewußte）」概念の叙述の検討を通して、第一局所論におけるフロイトの「無意識」概念の特徴を明らかにすることを課題とする。この作業を通じて、フロイト精神分析における主体と意識、および無意識との連関を検討するための予備考察を行いたい。

20世紀を代表する思想家であるフロイトの現代思想への貢献を一言で要約するならば、「無意識の発見」といわれる。彼が提出した無意識論は、19世紀まで西洋思想の主流であった意識を中心とした人間観に多大な衝撃を与えた。デカルト主義が存在と意識を同一視するのに対して、フロイトは、私たちに知覚される意識とは、私たちの心の一部分に過ぎず、私たちの行動の多くは無意識から影響を受けていると述べたのである。

しかし、「無意識の発見」というフロイトの功績が非常に有名であるにもかかわらず、実際にフロイトによる「無意識」に関する次の叙述を目にしたとき、私たちは「フロイトの無意識」の内実について理解していなかったことに気付かされる。たとえばフロイトは、無意識の核は、「その備給を放散させようとしている欲動代表（Triebrepräsenz）から、すなわち欲望の蠢きから成立っている」（G.W., 10 : 285 / 全、十四、二三四）と述べる。一見しただけでは私たちは、フロイトのこの一文が意味する無意識の構造や仕組み、その内実を理解することができないだろう。

このようにフロイトの功績が広く知られているにもかかわらず、フロイトの無意識の内実が知られていない理由は、「無意識」という言葉の性格にも起因するものと思われる。たとえば現代において「無意識」という概念がもつ意味を国語辞典で調べてみれば、「無意識」とは、「①意識を失っていること。②ある事をしながら、自分のしていることに気づかないこと。③本人は意識していないが日常の精神に影響を与えている心の深層。精神分析の用語」という三つの用法が提示されている<sup>1</sup>。

ここに示されたうち第二の用法で私たちは、たとえば「無意識に鼻をこする」というように、私の意識に知覚されないまま、いかえれば、私の意識に浮上せず潜在的なまま実行された行動を指し示す。次章で確認するように、フロイトが「記述的」とよぶこの「無意識」の用語法は、潜在的な意識状態としての無意識を意味する。意識は私たちにとって余りにも「自明」なものであるため、意識とその質を同じくするこの「無意識」も、私たちにとって日々経験される「自明」なものである。そのため、私たちがフロイトの「無意識」をこのように捉えてしまうと、フロイト思想をその根本から捉え損なってしまうことになるのである。

それに対して国語辞典では精神分析の用語とされる第三の意味の「無意識」を前にしたときにも、私たちは大きな困難にぶつかる。無意識が私たちに意識されないという性格をもつならば、その無意識の構造を私たちはどのように推測することができるのか。仮にある構造や働きをもつ無意識が推測されたとして、その場合、その無意識が実在するという証明は、何によってどのようになされるのか。いわゆる精神分析学派とよばれる思潮においても、たとえば創始者フロイトとその弟子ユング（C. G. Jung 1875-1961）とのあいだでは無意識の構造をめぐる見解の相違が生じ、それぞれの理論が分かれたのはよく知られている。

<sup>1</sup> 新村出編、『広辞苑 第五版』、岩波書店、一九九八

また歴史的な文脈に目を向けてみれば、近代日本において、フロイト精神分析をはじめとした西洋の知の受容とともに私たちの前に現れた「無意識」もしくは「潜在意識」は、その身に様々な意味を付与されて実に問題含みな働きをなしてきたのである。たとえばフロイト思想を日本で最初期に受容し紹介した中村古峽（1881-1952）によって、「潜在意識」は「一見しただけではわからない不可視の異常のありかとして位置づけられ」、他者を「異常者」として囲い込むさいの論拠として機能した<sup>2</sup>。それに対して、古峽が大々的な批判活動を展開した、近代日本の代表的な新宗教である大本教は、「無意識」を霊的なものが顕現する通行路であるとしてその存在を称揚したのである<sup>3</sup>。そしてこのような「無意識」をめぐる意味の覇権争いは、何も古めかしい議論でも全くなく、現代においても同様に「無意識」はその当人が自覚していない潜在的な意図を曝露するための手法<sup>4</sup>として、あるいは個人的宗教性を探求するためのモデル<sup>5</sup>として、その姿を私たちの前に示している。

しかしながら、フロイトが指摘する通り、夢や神経症、私たちの錯誤行為を考察の圏内に含めたとき、人間の行為を意識の観点からのみ記述し理解することに一定の限界があるのも事実であろう。そして当然のことながら、フロイトが自らの思想体系を構築し世に問うた一九世紀末から二〇世紀初頭にかけても、現代と同じく多くの論者によって、多種多様な「無

<sup>2</sup> 兵頭晶子、『精神病の日本近代』、青弓社、2008、p187

<sup>3</sup> 詳しくは兵頭（2008）を参照。

<sup>4</sup> たとえば香山リカは、精神分析家のウィニコット（Donald Woods Winnicott 1896-1971）を援用しながら、守護霊やオーラなどとよばれる「超越世界」とかかわりのある事象に惹かれる人たちの心性を分析し、超越世界に属するとされるそれらの事象は「現代人にとっての新しい移行対象」であるという解釈を提示する（2006:125）。ここでは「超越世界」にかかわる当人の主張の真実性は不問にされ、そうした人々の無意識の構造に、彼らがそうした事象に惹かれる原因が指定されている。

<sup>5</sup> 宗教学者の堀江宗正は、フロイトやユングの心理学は、「何らかの心的動因——たとえば無意識など——を宗教的事象の背後に想定する」ことによって、「宗教」についての説明力を心理学自身が持つようになったと指摘する（2009:17）。さらにそうした理論をもとに、「個人的宗教性をより成熟させると同時に、それに伴う危機的状况から個人を守る」（2009:244）ことを目的とした心理学者の理論を「心理学的思想運動」とよび、その特徴を「『宗教』を意識しつつも、『宗教』と距離をとり、『宗教』のある部分を批判的に継承する、ポスト『宗教』の思想運動として」まとめる（2009:23）。

「無意識」を想定することにより「宗教」を説明する心理学理論の特徴は、堀江によれば以下である。「まず、意識的自我を越えた力をもった実在がある。実在といっても、心理学的説明では、無意識的なもの、無意識、潜在意識として説明される」。「ある種の不可知論にもとづいて、神的実在をめぐる教義の真理主張そのものは問題とせず、それが心的現実として信者にとって重要であることを認め、さらにそれを無意識概念によって心理学的に説明をする。これが心理学的な宗教理論の基本的特徴である」（2009:230）。

このような心理学的思想運動の系譜に位置付けられる代表的な思想家、心理学者として、堀江はW・ジェイムズ（William James 1842-1910）、S・フロイト、C・G・ユング、E・フロム（Erich Fromm 1900-1980）、E・H・エリクソン（Erik H. Erikson 1902-1994）、A・H・マズロー（Abraham H. Maslow 1908-1970）、V・E・フランクル（Viktor E. Frankl 1905-1997）、E・キューブラー＝ロス（E. Kübler-Ross 1926-2004）の名を挙げる。もちろんこれらの心理学者の説明図式において、宗教的事象の原因としての「無意識」が指定されることは共通であるとしても、それぞれの「無意識」概念の内実には無視できない差異が存在する。しかしそれでも、堀江が取り上げる思想家の名前から推察できるように、心理学的思想運動にフロイトの「無意識」が与えた影響は大きい。

意識」が語られていたのである<sup>6</sup>。そうであるならば、なぜ「フロイトの無意識」が抜きんでて、それまでの意識中心の人間観を覆し、現代に到るまで長きにわたる思想的な影響力を保持するに至ったのか。「フロイトの無意識」の強大な影響力の一端を解明するためには、「無意識」概念を描出していく過程におけるフロイトの叙述に着目することが有効であろう。それは同時に、現代の私たちが人間を理解し説明する際に「無意識」なるものを語る時に生じる問題点を浮き彫りにすることになるだろう。

以上の問題を考察するために、本稿はフロイトが1915年頃に執筆した「メタサイコロジー諸篇」とよばれる論考を中心に検討する。1900年に主著『夢解釈（Die Traumdeutung）』を世に問うたフロイトは、自らの臨床経験の蓄積から、精神分析体系の基礎づけとなりうるような理論を構築しようと試みる。その内の一つの論文「無意識（Das Unbewußte）」（1915年）においてフロイトは、心の構造を意識・前意識・無意識という三つの系に分けて考察する、いわゆる「第一局所論」とよばれる思考を展開する。この第一局所論における「無意識」が、フロイトにより描出される過程を丁寧に辿りなおすことで、本稿はフロイトの無意識概念の特徴を明るみに出す<sup>7</sup>。

その際に本稿は、解釈学および反省哲学の立場からフロイト精神分析を綿密に検討したP・リクール（Paul Ricœur 1913-2005）のフロイト解釈を参照する<sup>8</sup>。リクールはフロイト精神分析の内に、意識と等置されるデカルト的な主体とは異なる、無意識をもその存在に含めた主体のありかたを見出し主題的に考察する。そのため、フロイト思想における主体と意識、無意識との術語連関を丁寧に検討した。リクールを参照することで、第一局所論におけるフロイトの無意識概念の特徴を経済論における欲動の〈代表〉（Repräsentanz）の機能に見出し、なおかつフロイトの無意識の实在性の有効性の範囲を画定することができる

<sup>6</sup>たとえばH・J・アイゼンクは次のように述べる。「フロイトより前に無意識の存在を想定し、詳述したひとは何百人もいます。いやそれどころか、心の問題を治療するときに、何らかの無意識の存在を念頭に置かない治療者は稀だったでしょう」（1985=1998:34-35）。「フロイト以前に、多くの哲学者、心理学者、それに生理学者までもが無意識を想定していた事実には疑問の余地がありません」（1985=1998:36）。フロイトの精神分析につながる「無意識」概念の思想史的文脈について詳しくは、エレンベルガー（1970=1980）を参照。

<sup>7</sup>自ら神経科医として医療行為に携わりつつ得た知見から、無意識を含めた人間の心の働きや構造を理論化していくフロイトの思想は、思想形成の過程でその理論や概念の意味がたえず更新されていくところに特徴がある。したがって、「無意識」や「意識」といったフロイト理論における基礎的な概念を、一義的に規定することは非常に困難であり、むしろ不可能とさえいってよい。その中で「無意識」概念を検討するにあたって本稿がメタサイコロジー諸篇に焦点を当てた理由は、ここにおいてフロイトの中でも重要な構図である第一局所論がまとまって考察され、心の中の一つの系としての無意識が、フロイト独特の語法である力動論、局所論、経済論との連関のなかで叙述されるからである。したがって本稿の「無意識」概念の検討は、大きく次の二つの限界をもつ。第一に、1900年の『夢解釈』第七章でフロイトが展開する、Ubw系の働きとメタサイコロジーとの連関の検討が不十分である。第二に、フロイトが1923年の『自我とエス（Das Ich und das Es）』において展開する、心を自我・エス・超自我という三つの審級に区別して考察する「第二局所論」との連関の検討が不十分である。1915年に提示されたフロイトのメタサイコロジーと、フロイト思想全体との連関を問うことは、今後の検討課題としたい。

<sup>8</sup>リクールのフロイト解釈について論じた研究としては久米博（1978）、池田清（1985）、櫻井一成（2014）などを参照。

う。さらにリクールのフロイト解釈において主題となる、主体と意識および無意識との連関を検討するための準備としての考察を最後に試みたい。

論述の流れは以下の通りである。第一に、フロイトが「無意識」概念を構築する際の留意点を丁寧に主題化して考察した 1913 年の論文「精神分析における無意識概念についての若干の見解 (Einige Bemerkungen über den Begriff des Unbewußten in der Psychoanalyse)」(以下論文「見解」) とその 2 年後の論文「無意識」を検討し、フロイトの「無意識」概念の構築過程に見出される特徴を整理する。第二に、メタサイコロジー諸篇の論文の検討を通して、第一局所論におけるフロイトの「無意識」概念がどのような叙述から構築されているのかを明らかにする。その際に本稿では、フロイト思想のなかでも特に難解な経済論を、リクールを参照して丁寧に検討する。第三に、リクールによるフロイトの無意識概念の批判的検討を参照し、フロイトの無意識を経験的および構成的な実在性として捉え、無意識の意味の変容に伴いそれと綿密な術語連関にあるフロイトの「意識」概念の変容を辿る。フロイトの無意識の受容により、直接意識は解釈学的意識に転化することになる。以上の考察を踏まえて、人間理解において「無意識」という視点を設定するに際しての注意点を提示したい。

## 2. 「無意識」概念の構築—論文「見解」と論文「無意識」

本章では、フロイトが「無意識」を主題的に論じた論文「見解」(1913) と論文「無意識」(1915) を検討する。第一に、論文「見解」を検討しフロイトによる「無意識」という言葉の三つの用語法の区別とその意図を明らかにする。第二に、論文「見解」と論文「無意識」において、フロイトによる「無意識」概念の構築過程に見出される三つの特徴を浮き彫りにする。

### 2.1. 論文「見解」における「無意識」の三つの用語法

1913 年の論文「見解」は、二年後の論文「無意識」を準備するものと目されている重要な論考である。この論文におけるフロイトの意図は、大きく分けて二つある。それは第一に、私たちがなぜ「無意識」という主題を考察する必要があるのかという点について、読者に対して説得的に論証することである。第二に、その論証に際して生じる「無意識」という用語の多義的な用法を、三つに整理してまとめることである。この論文においてフロイトは、「無意識」という用語の使い方を「記述的」、「力動論的」、「システムの」用法の三つに区別する。以上のフロイトにより並行して論じられていく二つの点を本節では検討したい。

「無意識」という主題を考察するにあたって、フロイトはまずある単純な事実に注意を促す。ある表象が今私の意識に現前しながら、次の瞬間にはそこから消えることができる。その表象は想起によって、新しい感覚的な知覚を必要とせずに意識に浮上することができる。この事実を理解するためには、この表象が意識のなかでは潜在的であったとしても、私たちの精神のなかには現前していたと仮定せざるをえない (G.W., 8 : 430 / 全、十二、二七三)。

このような事実を記述するためにフロイトは、以下のような用語の区別を提示する。私たちの意識のうちに現前し、私たちによって知覚される表象を「意識的」とよび、これだけを「意識的」の表現の意味として認める。それに対して、潜在表象、いいかえれば記憶は、それが心の生活に含まれているとの仮定に根拠があるとすれば、「無意識的 (unbewußt)」と

いう表現によって特徴づける（G.W., 8 : 431/全、十二、二七四）。この区分けの結果、私たちは「無意識的表象」という言葉によって、私たちには気付かれていないにもかかわらず、それ以外の徴候や証拠に基づいてその存在を認めることができる表象を指し示すことになる。これが「無意識」という用語の第一の「記述的」用語法である。

このような区分けは一見すると、ごくつまらない記述ないし分類の仕事として捉えられるだろう。しかしフロイトは、「後催眠暗示」とよばれる事例がこうした用語上の区別の価値を高めてくれるという。

後催眠暗示とは催眠現象の一事例である。催眠にかけられた被験者が、催眠をかけた医師によって催眠状態中に、ある行動をある時刻きっかりに実行するように依頼されたとする。その場合、被験者は覚醒後、催眠状態中に医師によってある行動を依頼されたということが想起されないにもかかわらず、先に取り決められた時間になると依頼された行動への衝迫が精神におしよせ、その行動は意識的に実行されるのである。このような現象を記述するような場合、「行動の企図は与えられた瞬間がきて意識的になるまでは、その人物の精神のうちで潜在形態ないし無意識的に存在していたと述べる以外には、ほとんど不可能であろう」（G.W., 8 : 432/全、十二、二七四 - 二七五）。

しかしこの実験は私たちに、さらなる啓示を与えるとフロイトはいう。私たちはその現象について、「純粋な記述的な把握から力動的把握に移行するよう導かれるのである。催眠の最中に依頼された行動の観念は、特定の瞬間に単に意識の対象となったばかりでなく、実効的にもなった（強調——フロイト）」（G.W., 8 : 432/全、十二、二七五）。つまり依頼された行動の観念は無意識的であったにもかかわらず、同時に被験者の意識に働きかけて行動を実行させる実効力を備えていたのである。

この実効的でかつ無意識的な表象に、なぜフロイトはこだわるのか。その理由は、まさにそれこそが、フロイトがそれまでに研究してきた神経症患者の心の生活に充満し、症状を発生させていたからである。たとえば『ヒステリー研究（Studien über Hysterie）』（1895）で取り上げられた有名なアンナ・O嬢の場合、彼女は自分でも理由が分からず、夏のひどく暑い時期にグラスから水を飲むことができなくなった。しかし彼女は一度催眠下に置かれたときに、ある犬がグラスから水を飲んでいてことを目撃し、それに強い嫌悪感を感じていたことを思い出したのである。その出来事を語り尽くすことによって、彼女は再び、グラスから水を飲むことができるようになった（G.W., 1 : 232-233/全、二、四〇 - 四一）。つまりここで彼女は、強い嫌悪感をもたらした出来事と結びついた、グラスという無意識的表象に支配されていたのである。

以上の後催眠暗示の事例と神経症の分析から、フロイトは次の帰結を引き出す。つまり、潜在的表象とよばれるものには二種類ある。意識に参入することができる潜在的表象と、どんなに実効力が強かろうと、意識のうちに突入することができない潜在的表象である。これら二種類の表象を区別して指し示すためにフロイトは、第一の記述的な用語法と区別しながら、意識に参入可能な潜在的表象を新たに「前意識的（vorbewußt）」と名づけ、その強度と実効性にもかかわらず、意識に参入することができない表象を「無意識的」と名づける

(G.W., 8 : 434/全、十二、二七六 - 二七七)。これが「無意識」の第二の「力動論的」用語法である<sup>9</sup>。

しかしながら前意識的な表象と無意識的な表象を区別することは、単なる分類の仕事に留まらず、私たちの心の活動における、機能論的で力動論的な関係についての意見を形成するように誘う。つまりここに、無意識的な表象が意識に突入するのを排除する生きた力が洞察されるのである。私たちの意識に「抵抗」として知覚されるその生きた力こそ、次章で詳細に検討する「抑圧 (Verdrängung)」の機制である。私たちの心の活動には、前意識的な表象に対しては何の妨害もしないが、無意識的表象に対しては、それを意識の内に引き受けることを反対する力がある。つまりここで「無意識」の力動論的な用語法には、無意識的表象の意識に対する実効力という意味と、それが意識の突入に際して抑圧されているという意味での二つの力関係が含意されているのである。このようにフロイトは、無意識の記述的用语法のみでは、実際の神経症の事例をいい表すことができないことから、無意識の力動論的用语法を案出したのである。

さらにフロイトは、前意識的表象と無意識的表象を分け隔てる「抑圧」とよばれる障壁の認識をこえて、精神分析は夢の分析を通して、意識的活動の法則とは大幅に異なった無意識的な心の活動の法則を明らかにしたと述べる (G.W., 8 : 438/全、十二、二八〇)。この発見された無意識的な心の活動の法則に服した心のなかの一つの「系 (System)」を指し示すために、フロイトは「無意識的なもの[*das Unbewußt*』の短縮形である『*Ubw*』という文字列を提案」する。この用法こそが、「『無意識的』という表現が精神分析において獲得した第三の、そしてもっとも重要な意味である」 (G.W., 8 : 438-439/全、十二、二八一)。すなわち、「*Ubw*」という略記号によって心のなかの一つの系としての無意識を示すのが、「無意識」の第三の「システムの」用語法である。

以上のように論文「見解」においてフロイトは「無意識」をめぐる三つの用語法を展開したが、重要なのは「無意識」という用語が記述的な用法からシステムの用法に移行するにつれて、「無意識」が形容詞から名詞へと変化することである。「無意識」という用語は、形容詞としての状態を記述するための概念から、システムの用語法においては、心のなかで意識とは区別される一つの系を指し示すために名詞として扱われる。この「無意識」の意味の変遷がもたらした影響は第四章で改めて考察する。

## 2.2. フロイトによる「無意識」概念の構築過程に見出される三つの特徴

フロイトは論文「見解」において、自らの医師としての臨床経験で観察された事例を理解し説明するために、「無意識」という用語の使い方を丁寧に検討している印象を受ける。私たちはここで、フロイトが「無意識」という概念を構築する過程に見出されるいくつかの特徴に留意する必要がある。本節では二つの論文から見出された三つの特徴を取り上げて整理する。

<sup>9</sup>フロイトは、この力動論的な意味での無意識的な表象は病的な心理状態だけでなく、健康な人の心理においても働いていると考えた。その一つの事例は夢であり、もう一つの事例は、失言や記憶間違い、言い間違い、名前の度忘れなどの錯誤行為である。フロイトはそれぞれの主題を、1900年の『夢解釈』および1901年の『日常生活の精神病理学にむけて (Zur Psychopathologie des Alltagslebens)』において主題的に論じている。

第一の特徴は、意識によって直接的には知覚されない無意識的な表象や、系としての無意識を論じる場合、フロイトは必ず、それらの実在を示す間接的な証拠を提示する点である。フロイトによれば、「精神分析の技法」を用いて神経症患者を分析した場合、力動的な意味での無意識的な「思念が心の生活に現存することについては、間接的ながら、意識によって提出される直接的証明にほとんど匹敵するほどの有無を言わせぬ証明がなされる（強調—引用者）」（G.W., 8 : 433 / 全、十二、二七六）という。

しかしながらここで重要なのは、精神分析によって間接的に証明される無意識は、あくまでもフロイトの理論により構成されたものに、いかえれば、絶対的な実在としてあるのではなく、フロイトの理論と相対的な実在としてあるようにみえるという点である。フロイトは無意識の実在性に関して、二年後の論文「無意識」でも次のように述べる。「意識の所与は、甚だしく隙間の多いもの」であるため、「無意識というわれわれの仮定は必要かつ正統的であり、無意識の存在について幾重もの証拠を捉えている」（G.W., 10 : 264-265 / 全、十四、二一二）。意識的な行為のみを私たちの心の行為として認める場合、錯誤行為や夢、また強迫現象などの病的な心的症状や思いつきなどは、私たちにとって意味の連関を欠いた理解できない行為にとどまる。それに対して、もし私たちが「推論した無意識の行為をそこに挿入してみるならば、それらは証示可能な関連性のうちに秩序づけられることになる」（G.W., 10 : 265 / 全、十四、二一二）。しかしあくまでここからいいうるのは、推論された無意識の行為を挿入することによって、私たちの多様な心の行為について、意識のみからの観点に比べてより広範かつ秩序だった理解可能性を得るということに留まる。

この第一の特徴とも連関する第二の特徴は、無意識概念が理論と事実のあいだで循環的に基礎づけられている点である。フロイトは「無意識という仮定に基づいて、意識過程の経過に対して目的に叶った影響を及ぼすための手順を組み立てることができたとすれば、この成功は、われわれが仮定しておいた無意識の存在にとっての動かしがたい証拠となる（強調—引用者）」（G.W., 10 : 265 / 全、十四、二一二 - 二一三）という。ここには次のような循環がある。まず、観察された多様な心の働きを理解するために、ある仕組みをもつ無意識が推論される。次にその無意識の存在を前提にして、治療の技法が構築される。そして、その治療の成功の事実が、治療の土台にある無意識の実在を正当化する。しかし治療の成功がそのまま、フロイトの無意識の実在性を証明する「動かしがたい証拠」とまでいい切ることは適切なのだろうか。ここからフロイトの無意識の実在性を規定する別の条件を引き出すべきなのではないか<sup>10</sup>。

第三の特徴は、フロイトは意識から独立した無意識を認めず、意識と無意識の連続性を強調する点である。「意識のうちに突入してこないある種の潜在的な思念」（G.W., 8 : 433 / 全、十二、二七六）というとき、そこではすでに、抵抗として感じられる生きた力を境に、意識と無意識が接している<sup>11</sup>。フロイトはそれを次のようにもいえる。私自身の心の出

<sup>10</sup> 第4章1節を参照。

<sup>11</sup> フロイトはここで、意識は分割されうるといふ仮説を採用する論者を取り上げて批判する。そうした論者は、意識と無意識の連続性を重要視せずに、表象や心の出来事は分離された意識を形成することができ、それぞれの意識は、「意識的な心的活動の主流となる集塊」から分離し疎遠となりうると主張する。それに対してフロイトは、意識の分割の仮定は単に「意識的」という語の濫用から利益を得ているだけであり、「この語の意味を拡張

来事の中で、私の意識とどう結び付けていいのかわからないような行為や表現を判断し、解明しようとしたとき、人は、「無意識を発見するところへと向かうのかというと、そうではなくて、正確に言えば、別の第二の意識を仮定するところに至る。それは、私に知られている意識に、私という人物の中で結びついているような意識である（強調——引用者）」（G.W., 10 : 268-269 / 全、十四、二一六）。フロイト自身による精神分析の成果に対するこの言明は、常に念頭に置く必要があるだろう。精神分析は、私に知られている意識と連続性をもつ第二の意識を仮定するところから始まるのである。この意識と無意識の連続性の強調はフロイト思想の要である。この点に関しては第四章において再び考察する。

以上のようにフロイトはあくまでも、それまでの哲学において主流であった、意識を中心においた記述では理解できない事象へと理解の可能性を拡張するために、無意識概念を構築していったことが確認されよう。またフロイトの無意識は、フロイトの主張とは異なりいくらか構成的な性格をもつように思われた。フロイトの無意識の実在性の条件については、第四章において改めて考察する。

次章では論文「見解」の準備的な考察を踏まえて、「無意識」という概念がフロイトによりどのような叙述により構築されていくことになるのかを辿っていく。

### 3. 第一局所論における「無意識」概念の考察

本章では論文「無意識」においてフロイトが詳述する「無意識」概念を、メタサイコロジー的な叙述との関連を整理しながら明らかにしたい。論文「無意識」では後に「第一局所論」とよばれることになる、心を意識・前意識・無意識の三つの系をもつ構造として図式化する理論がフロイトにより展開される。さらにフロイトはこの論文で、自身の精神分析研究の完成ともいえる観察法を「メタサイコロジー」とよび、それを次のようにいい表す。

「心的な出来事を、力動論的、局所論的、そして経済論的な諸関係に従って記述することに成功すれば、それをメタサイコロジー的な呈示と呼ぶことを、私は提案したい（強調——フロイト）」（G.W., 10 : 281 / 全、十四、二三〇）。本章では第一に、フロイトの第一局所論における無意識を叙述する観点となるメタサイコロジーの力動論、局所論、経済論をそれぞれ明らかにする。第二に、それによって叙述される無意識概念を理解する上で重要な「抑圧」の機制と欲動との複雑な関係性を検討する。以上の考察を通して、これらの叙述によって提示される第一局所論のフロイトの無意識を簡潔に提示する。

---

して、その所有者すら何も知らない意識をも表示できるようにする権利はわれわれにはない。哲学者たちは無意識的思念の存在を信ずるのは困難だと考えるにしろ、わたしからするなら、無意識的意識の存在の方がよっぽど攻撃を受けるべきものに思われる」（G.W., 8 : 434 / 全、十二、二七七）と述べる。

論文「無意識」でもまたフロイトは、心の生活の潜在的な状態と意識的な心の出来事の間には、「豊富な接点」があることを強調する。それら潜在的な状態は、一定量の仕事によって、意識的な心の出来事への変換や代替が可能であり、潜在状態は「意識から脱落しているというその一点においてのみ」意識的な状態から区別される。そのため、両者を心理学的研究の対象として、「意識的な心の行為とのきわめて密接な関連の下に取り扱うことを、ためらってはならない」（G.W., 10 : 267 / 全、十四、二一四）。

### 3.1. 論文「無意識」におけるメタサイコロジー

論文「無意識」においてフロイトは、心の働きを力動論、局所論、経済論という三つの契機から叙述し、それを自ら「メタサイコロジー」とよび表わす。フロイトはこのメタサイコロジー的な叙述を通して、心を意識・前意識・無意識という三つの系として提示する第一局所論を展開するのである。したがってフロイトの無意識を理解するには、まずはフロイトのメタサイコロジーを、つまりはそれを構成する三つの視点をそれぞれ理解する必要がある。

まずフロイトは論文「見解」を引き継ぎつつ、「無意識性」という心的な性格は、記述的な意味や力動論的な意味などの多義性を含みこむことを確認する。そのうえでフロイトは、精神分析は「心の出来事の力動論的理解」に加えて、「心的局所論を考慮」することによって、「記述的な意識心理学から一步距離を取って、新しい問題設定と新しい内容とを備えるに至った」（G.W., 10 : 272/全、十四、二二〇）と述べる。つまりここでフロイトは、無意識を含む心を力動論的、および局所論的見地から考慮することによって、精神分析は無意識を記述的な意味で把握する心理学から距離を取ると述べる。

心の出来事に対する力動論的見地とは、前章で論及した「無意識」の力動論的な用語法と同じく、意識と無意識のあいだの力関係である検閲や抑圧に着目する視点であるとされる。それに対して局所論的見地とは、「相互に階層的に秩序づけられた心的な系への関連性や所属性」（G.W., 10 : 271/全、十四、二一九）に従って、心の出来事を分類し関連付ける視点である。フロイトは、人間の心には、いくつかの質的に異なる複数の領域があると考えていた。観察された多様な心的行為から異なる特性を識別し、その特性をそれぞれ保持した心的な系を推論できるとフロイトは考えたのである<sup>12</sup>。こうしてフロイトは、意識の特性を持つ系をドイツ語の「Bewußtsein（意識）」の頭文字をとって「Bw」もしくは「Bw系」とよび、同様に無意識の特性をもつ系を「Ubw」もしくは「Ubw系」という略記号で示す。

Bw系とUbw系は、検閲とよばれるある種の試験により隔てられ、Ubw系に属する無意識的な心的行為は、検閲の試験に拒絶されればBw系への移行は不首尾に終わる。そのときこの心的行為は「抑圧された」といわれる。検閲の試験に耐え抜けば、心的行為はBw系とよばれる第二の系に入ることになる。しかしながら、正確に言えばこの心的行為は意識に参入できる状態にあり、いいかえればいくつかの条件がそろえば、抵抗にあうことなく意識の対象となりうる状態にある。この意識への参入可能な状態の相を、フロイトは改めて「前意識」とよび、それを「Vbw」もしくは「Vbw系」という略記号で示す。したがって、厳しい検閲が立ちだかるのは、Ubw系からVbw系への移行にあるということになる。このように心を三つの異なる特性をもつ系からなるものとして仮定し、「任意の心の行為について、どの系の内部で、またどの系とどの系の間でその行為が行われたのかということ」を陳述しよ

<sup>12</sup>心のこうした捉え方は、1900年の『夢解釈』において「心的局在性（Psychische Lokalität）」という概念のもとに導入される。フロイトはここで、心の働きを解明するために心を機械的な装置として想定し、「心の作業に仕えている道具立てを、たとえば組み立てられた顕微鏡、あるいは写真機、などのように思い描いてみる」ことを提案する。このとき、心的局在性とは「ある装置の内部のある場所に対応し、その場所において、像のいくつかの前段階のうちの一つが結ばれるということになる」。この試みは「心的な営みを分解し、装置の個々の成分に、個々の営みを割り振る」ことで、「心的な営みの複雑さを理解できるようにしようとする」ものであるとフロイトはいう。心の装置のそれぞれの構成成分を、フロイトは「審級（Instanz）」もしくは「系（System）」とよぶ（G.W., 2/3 : 541-542/全、五、三二五 - 三二六）。

うとする」見方が、局所論的見地である（G.W., 10 : 272/全、十四、二二〇）。局所論は論文「見解」における「無意識」のシステムの用語法を引き継いだものである。

このように、抑圧や検閲によって心的な系のあいだに境界線が引かれるのであるから、力動論と局所論は緊密に結びついた視点である。第一局所論におけるフロイトの無意識とは、この心的局所のひとつとしての無意識である。したがって、この系としての無意識の特徴を指し示すことのできない記述的な用語法としての「無意識」は、フロイトの無意識概念の構築において必要とされなくなるのである。

この局所論的見地から、フロイトの無意識概念はその特異な性格を示し始める。フロイトは既に 1900 年の『夢解釈』において、夢の分析から Bw 系、Vbw 系、Ubw 系それぞれの働きや特性を描き出している。それぞれの心的系の特徴の解説は他書に任せることにして、本節では続けてメタサイコロジーの第三の経済論的見地について検討する。経済論的見地とはどのような見方であり、フロイトはなぜそれを必要としたのだろうか。

論文「見解」から考察を始めた私たちは、フロイトが「無意識」の記述的な用語法を自らの無意識概念を造形するための視点として斥け、それに対して「無意識」の力動論的用語法、およびシステムの用語法を、それぞれ力動論、局所論として引き継いだことを確認した。それに対してフロイトがメタサイコロジーにおいて提示する経済論という見地は、いかなればフロイトの無意識論に留まらず、フロイト精神分析の全体を初期から規定する視点である。用語の説明から入れば、フロイトのいう経済論とは、心的エネルギーというある種の量を想定し、その変遷として心的現象を説明する理論的見地である。フロイトの思想は、無意識論を含めて初期から一貫して、その当時の自然科学的な思潮から影響を受けたエネルギー論という枠組みで構築される。したがってフロイトの無意識を規定する経済論を理解するためには、エネルギー論を前提とした彼の基本的な人間観を先に理解する必要がある。

フロイトの人間観の最も大きな特徴は、「欲動 (Trieb)」を人間理解の根底におく点である。当時の自然科学における支配的な思潮と同じく、フロイトは、人間を動かしているのは、人間の有機体の内部に働いているエネルギーであると考えた。人間以外の動物の場合、このエネルギーを生存行動へと導く水路は遺伝的に決定されている。動物に内在するこのエネルギーの水路、すなわちその種に固有の行動パターンをフロイトは「本能 (Instinkt)」(G.W., 10 : 294/全、十四、二四四) とよぶ。しかしながら人間の場合、有機体内のエネルギーは遺伝的に決定された水路を持たない。たとえば人間の性欲動の場合、それは生殖行為に留まらずその他の多種多様な行動を導く。この人間的な特徴を意味するために、フロイトはこのエネルギーを本能と区別して「欲動」とよぶのである。

欲動概念が体系的に考察された 1915 年の論文「欲動と欲動運命 (Triebe und Triebchicksale)」(以下論文「欲動」)によれば、欲動の刺激の発生源は私たちの身体の内部にあるために、外的な刺激であれば可能な逃避活動も欲動では意味をなさない。そのため、欲動は恒常的な力として働く。フロイトはここで、人間のさまざまな行動の背後に想定される源泉としての欲動を二つ考え、それを「原欲動 (Urtrieb)」とよぶ。その二つとは、「自己保存欲動」と「性欲動」である (G.W., 10 : 216-217/全、一四、一七四)。

この欲動の体系化は、フロイトによるいくつもの思弁的な仮説も含意されている。その第一は、心の装置は快の獲得を目指し、不快を回避しようとするという「快原理の支配下にある」という仮定である。ここにはフロイトの第二の仮説、すなわち、有機体の内部で発生する欲動刺激の増大が、不快の感覚として、刺激の減少が、快の感覚として知覚されるという

仮定も含まれる（G.W., 10 : 214 / 全、一四、一七一）。フロイトは性欲動の心的なエネルギーを「リビード」とよび、このリビードという興奮量が、心的装置の各系に備給されるさまを記述することで、心の働きを説明することができる考えたのである。このように「興奮量の運命を追跡し、少なくともその相対的な評定を行おうと努める」見方が経済論的見地である。ここにおいて、フロイトのメタサイコロジー的呈示に現れる三つの視点は出そろったことになる（G.W., 10 : 280 / 全、十四、二三〇）<sup>13</sup>。

以上のように明らかにされた力動論、局所論、経済論的な三つの契機から、フロイトは心の構造を意識・前意識・無意識という三つの系からなるものとして叙述する。次節では引き続き、第一局所論における無意識の内実を検討する。

### 3.2. 〈力〉と〈意味〉としての無意識—欲動と抑圧の検討

第一局所論における無意識を理解するためには、それとメタサイコロジーの三つの視点との連関を正確に把握する必要がある。フロイトの無意識を叙述するためのこの三つの視点と最も密接にかかわる心の働きが、「抑圧（Verdrängung）」である。力動論的視点を特徴づけるのが、抑圧や検閲とよばれる意識と無意識のあいだの力の働きに着目することであった。またこの抑圧によってひかれる境界線によって、Vbw 系と Ubw 系とが区別される局所論が導入されることを確認した。それでは、抑圧によって意識から区別される無意識の内実とは何なのか。また抑圧を遂行する心の仕組みとはいかなるものなのか。抑圧とメタサイコロジーの三つの視点との連関をときほぐすために、本節では再びフロイトのエネルギー論、すなわち欲動概念を詳細に検討する。本節ではフロイトの無意識の特徴とその内実を明らかにするために、欲動と抑圧の機制、およびそれとメタサイコロジーとの関連性を丁寧に検討する。

論文「無意識」の「抑圧の局所性と力動性」と題された第四章で、フロイトは次のように述べる。「抑圧というものは基本的に、Ubw 系と Vbw (Bw) 系との境界にある表象に関して遂行される過程であり、そのときに問題となるのは表象に対する「備給の撤収」である（G.W., 10 : 279 / 全、十四、二二八）。つまりフロイトは、ある表象はリビードが備給されると意識的になり、反対にそれが撤収されると抑圧されて無意識的になると考えていた。したがって抑圧の働きを説明するのはエネルギー論、つまり経済論的視点である。このように考えると抑圧された無意識の内実は、リビードが撤収された表象として理解されよう。しかしながら、別の箇所ではフロイトは、「われわれは精神分析の経験から、抑圧過程の本質は、欲動を代表する表象（den Trieb repräsentierende Vorstellung）」が「意識になることを妨げる

<sup>13</sup> 1920年の『快原理の彼岸（Jenseits des Lustprinzips）』ではメタサイコロジー及び経済論は以下のように説明される。「心の出来事は快原理によってその経過が自動的に制御される、とわれわれは精神分析の理論において無頓着に仮定している。すなわち、心の出来事はいつでも、ある不快な緊張に刺激されて始まり、ついで、最終結果がこの緊張の低下に合致するように、つまり、不快を回避し快を産出するように、舵取られ経過してゆく、と信じている。これまで研究されてきた心のプロセスを、心の出来事のこうした経過をにらみつつ考察するなら、経済論的観点がわれわれの仕事のうちに導入されることになる。思うに、局所論的契機と力動論的契機に加えてさらにこの経済論的契機を考慮に入れる叙述が、現在考えるなかでもっとも完備した叙述であって、メタサイコロジー的叙述という名を与えて、特記するに値するものである（強調—フロイト）」（G.W., 13 : 3 / 全、一七、五五）。

ところにあることを学び知った」(G.W., 10 : 264/全、一四、二一一)ともいう。この「欲動を代表する表象」とは何を指すのか。抑圧の機制を理解するために私たちは、フロイト精神分析における欲動とそれの心的平面における代表、および表象とのあいだの難解で問題含みな関係をまずは理解しなければならない。

前節で確認したように、欲動とはまず人間の身体内に働くエネルギーである。しかし、欲動とそれの心的代表という概念に関してはフロイト自身の論述にも揺らぎがあり、精神分析における解釈の分かれ道があると、フロイトの著作の英語版への翻訳者でもある J・ストレイチー (James Strachey 1887-1967) は指摘する。フロイトは欲動について最も体系的に考察した論文「欲動」の、まさに欲動の定義について述べていると目される箇所において、欲動とは、「心的なものとの身体的なものとの境界概念としてわれわれの目に映る」、すなわちそれは、「身体内部に発し心の内へと達する刺激を心的に代表するもの (psychischer Repräsentant)」(G.W., 10 : 214/全、一四、一七二) であると述べる<sup>14</sup>。すなわちここでフロイトは、「欲動」と「欲動刺激を心的に代表するもの」は同じものであるかのように語っている<sup>15</sup>。

しかし一方でフロイトの論述には、欲動とそれの心的代表を明瞭に区別して述べる箇所も散見されるのである。たとえばフロイトは、論文「無意識」において、「欲動は意識の対象には決してなり得ず、欲動を代表する表象のみが、意識の対象になり得る。しかしまた欲動は、無意識においても、表象によって代表されるしかない」(G.W., 10 : 275-276/全、一四、二二四) と述べる<sup>16</sup>。以上のことからストレイチーは、「『欲動』は、身体的なものか

<sup>14</sup> フロイトの著作の英語版全集 (Standard Edition 以下 S.E.) に所収の『欲動と欲動運命』に付されたストレイチーによる「編者解説」によれば、ここで用いられたドイツ語の Repräsentant は、「法律的ないし社会体制上の代行者」という限定的な意味で用いられる語で、フロイトによるこの語の用例は少なく、その後はより一般的な語である Repräsentanz が用いられている。この指摘を行った上で S.E. は、Repräsentant と Repräsentanz の両方を representative という一つの英語で訳している。フロイト全集では、Repräsentanz の訳語として「代理」、「代理表現」あるいは「代表」をあてている (全、一四、三六二)。

<sup>15</sup> フロイトが「欲動」とそれの「心的代表」を同じ意味合いで言及している箇所は次の通りである。第一に既に本文で引用した、論文「欲動」における、「欲動」とは「身体内部に発し心の内へと達する刺激を心的に代表するもの」であるという一節。さらに 1911 年の論文「自伝的に記述されたパラノイアの一例に関する精神分析的考察 [シュレーバー] (Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoides))」では、「われわれは、欲動を心的事象に対する身体的事象の限界概念として理解しており、欲動において有機体的諸力の心的な代理表現を認め」と書いている (G.W., 8 : 311/全、一一、一七九)。そしてまた、論文「欲動」の数か月前に書かれた『性理論のための三篇 (Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie)』の第三版に加えられた文では、「欲動」とは「連続して流れている内身体的な刺激源泉の心的代理にほかならないと理解することができ」、「心というものを身体的なものから区別する境界づけの概念の一つである」と書いている (G.W., 5 : 67/全、六、二一四—二一五)。これら三つの記述は、フロイトが欲動とその「心的代表」とのあいだに何の区別もつけていないということを簡単に示しているようであると S.E. は述べる。

<sup>16</sup> フロイトが「欲動」とそれの「心的代表」を明瞭に区別している箇所は次の通りである。第一に既に本文で引用した論文「無意識」における、「欲動は意識の対象には決してなり得ず、欲動を代表する表象のみが、意識の対象になり得る。しかしまた欲動は、無意識においても、表象によって代表されるしかない」(G.W., 10 : 275-276/全、一四、二二四) という一節。また論文「抑圧 (Die Verdrängung)」では、「欲動の心的な (表象の)

ら心に対しての『代表』そのものであるのか、または、『欲動』がさらに何らかの『代表』を心に向かって送り込むのであろうかということに関して、フロイトの論述は議論の余地を残している」（全、一四、三六二）と指摘する。前者の見解では、欲動そのものが、身体的な力の心的な代表（the psychical representative of somatic forces）とみなされているのに対して、後者の見解では、欲動それ自体は心的ではない何か（something non-psychical）とみなされている<sup>17</sup>。

ストレイチーに議論の余地が残されていると評されたこの箇所に、フロイト精神分析における重要な主題を見出す解釈を展開するのが、精神分析を解釈学として理解するリクールである。リクールは、エネルギーとしての欲動は心的代表の中にみずからを示し、明らかにし、〈意味〉としての表象として現れると述べる。そしてそれを可能にするのが、フロイトにより特に何の説明もなく要請される欲動の「Repräsentanz〈代表〉」の機能であるとリクールはいう。

リクールによれば〈欲動の心的代表〉こそが、フロイト精神分析における〈力の言説〉と〈意味の言説〉の一致点であるという。フロイト思想とは〈力〉と〈意味〉の混合語法である。それはつまり、フロイトは初期から一貫して、心の働きを欲動というある種のエネルギーの働きによって、つまり〈力〉の表現を用いて理論化する。しかしながら同時にフロイトは、そうした欲動の経済論によって構築される夢や神経症に隠された〈意味〉を解釈する。ここに一見するとアポリアが浮き彫りになる。〈力〉としての欲動の次元と、私たちに解釈可能な表象の〈意味〉の次元には、大きな隔たりがあるはずである。しかしフロイトはその両者を、欲動の〈代表〉の機能によって一息で架橋する。〈力〉としての欲動は、自らを心的平面において代表し、心的代表として〈意味〉の次元に到来する。つまりは私たちによって解釈可能なものとなる。だからリクールは、「もっと根本的に、欲動は心的平面で身体を魂の中で代表する、表現する」（DI, 140=1982:147）と述べる。

この欲動の定義のうちに記入された〈代表〉の機能にフロイトは何の証明も与えていない。フロイト精神分析においては〈代表〉の機能が、無意識から意識への転化や翻訳を可能にする。つまりこの機能こそが、意識と無意識のあいだには系を分離する境界線があるにもかかわらず、両者は共通の構造をもつという仮定なのである。だからフロイトは論文「無意識」の冒頭で何の前置きもなく、「われわれは無意識を、それが意識への転化や翻訳を経過したあとでしか、識ることはできない。精神分析の作業は、日々、このような翻訳が可能であることを教えている」（G.W., 10 : 264/全、十四、二一一）と述べるのであ  
る<sup>18</sup>。

---

代表」について語り、原抑圧においては「当該の代表は不変のままに存続し、欲動は、その代表に結びついたままになる」と述べる（G.W., 10 : 250/全、一四、一九七—一九八）。さらに同じ論文でフロイトは、「欲動代表というものを、一定の心的エネルギー（リビード、関心）の量をもって欲動からの備給を受けている表象または表象群である」と述べる（G.W., 10 : 254-255/全、一四、二〇二）。

<sup>17</sup> S.E.によれば、欲動の性質についての相異なる二つの見解の双方が、その後のフロイトの著作においても見られるが、数としては後者の見解の方が多という（S.E., 14 : 111-113）。

<sup>18</sup> 本稿では検討することができないが、フロイトによれば欲動を代表するものは、表象のほかにもうひとつ「情動総計（Affektbetrag）」もしくは「情動（Affekt）」がある（G.W., 10 : 255/全、十四、二〇二）。この「情動」をめぐるリクールの解釈については、池田（1985）を参照。

したがって本節冒頭の問いにもどれば、抑圧された無意識の内実とは、欲動のエネルギーであると同時に、欲動を心的平面において代表した表象であるといえよう。だがしかし、欲動は心的領域において表象によって表現されると、簡単にいい切ることができないのである。つまり欲動の心的代表と、私たちに解釈される表象とを同じものであると早計に理解してはならない。ここには更にもう一点、欲動と抑圧をめぐる複雑な点を理解する必要がある。

フロイトによれば抑圧とは、意識的な心の活動と無意識的な心の活動とのあいだに鋭い区別が打ち立てられた後に成立したものであり、「その本質は、意識的なものを退け、遠ざけておくことにある（強調——フロイト）」（G.W., 10 : 248 / 全、十四、一九七）。フロイトがここで明らかにするのは、抑圧が発生する理由と、その仕組みである。欲動の目標が全て等しく快を得るということであるならば、なぜそれが抑圧される必要があるのか。

フロイトによれば、正確にいうと抑圧には二つの段階がある。フロイトはそれを、「原抑圧」と、「本来固有の抑圧」もしくは「踏襲性抑圧」とよび、私たちが日常的にいう抑圧は、後者のことを意味するという。

原抑圧とは、抑圧の最初の相期であり、それは「欲動の心的な（表象の）代表（*der psychischen (Vorstellungs-) Repräsentanz des Triebs*）が、意識的なものの中へと受け入れられることが不首尾に終わるといことに存している。そしてこれによって、固着が成立する。ここからは、当該の代表は不変のままに存続し、欲動は、その代表に結びついたままになる（強調——フロイト）」（G.W., 10 : 250 / 全、一四、一九七 - 一九八）。固着とは、「ある欲動あるいは部分欲動が、正常の場合に予見されるような発達を示さず、この発達制止の結果、ある幼児段階に留まる事態」（G.W., 8 : 303-304 / 全、一一、一七〇）である。

それに対して抑圧の第二の段階が、本来固有の抑圧、もしくは踏襲性抑圧ともいべきものである。その抑圧は、原抑圧に服した欲動の心的な「代表の心的なひこばえ 蘖（*die psychische Abkömmlinge*）に対して向けられるか、あるいはその代表とは別のところに由来しつつも、その代表との連想関係を持つようになってしまった思考系列に向けられる」（G.W., 10 : 250 / 全、一四、一九八）。ここで全集では「ひこばえ 蘖」と翻訳された「*Abkömmlinge*」というドイツ語は、蘖や若枝の他に子孫という意味をも持つ語であり、英語では「*derivatives*（派生物）」と訳されている。この第二の抑圧の担い手は自我であり、自我はその欲動を意識化することを嫌悪し拒絶するから抑圧が生じる（G.W., 8 : 304 / 全、一一、一七〇）。つまり、「抑圧の条件なるものは、満足の快よりも（自我の——引用者）不快の動機がより強い力を持つこと」である（G.W., 10 : 249 / 全、一四、一九七）。このときに、その欲動代表の心的な蘖、いいかえれば派生物は、自我によりリビードの備給が撤収され、意識への突入を妨げられるのである<sup>19</sup>。

<sup>19</sup> 備給の撤収と抑圧に関しては、論文「無意識」の特に第七章において、フロイトにより更に踏み込んだ考察がなされているのをここで確認しておく。フロイトは、抑圧の過程は備給の撤収が問題となっていると述べた箇所ですぐあとに、抑圧された表象は *Ubw* 系のなかで実効力を保持しているという事実を指摘する。その事実を説明するためにフロイトは、抑圧された表象は「備給も保持している」のでなければならず、「撤収されたものは

この原抑圧と踏襲性抑圧の区別が示すのは、私たちが意識化し知ることができる欲動の心的代表と、欲動の原初の代表には大きな隔たりがあるということである。このように理解すると、Ubw 系には、原抑圧に服した欲動の原初の心的な代表としての表象がある。それに対して、Bw 系には欲動の心的な代表の派生物しか突入しえない。私たちが原抑圧を越えて欲動の原初の代表に遡る方途について、フロイトは一言も語らなかった。したがって、私たちに意識化される表象は、欲動そのものでも、欲動の心的代表そのものでもなく、原抑圧によって Ubw 系に抑圧された欲動の代表からの派生物なのである。さらに Ubw 系における欲動の心的な代表も、欲動そのものの姿ではなく、〈代表〉の機能によって欲動自身が表象としてその姿を現したものである。このようにみると無意識とは、これら派生物としての表象の無限の枝分かれによって構成された、細かな網状組織と見ることができるだろう。そのような形で無意識は体系を持っているといえる。

以上の考察をふまえるならば、論文「無意識」の第五章「Ubw 系の特別な特性」において、フロイトが Ubw 系の第一の特徴として述べる次の一文がよく理解できるだろう。すなわち、Ubw の核は、「その備給を放散させようとしている欲動代表から、すなわち欲望の蠢きから成立っている」（G.W., 10 : 285 / 全、十四、二三四）。ここにこそ、〈意味〉と〈力〉の混合語法としてのフロイト思想の性格が端的に示されている。フロイト思想はまず第一にエネルギー論であり、〈力〉としての欲望は発散されることを求めている。しかしながら欲動は、〈代表〉の機能によって〈意味〉の次元に到来し、欲動代表から派生する表象として私たちに解釈される。したがって Ubw の核は、〈意味〉の次元の「欲動代表」であると同時に〈力〉の次元である「欲望の蠢き」なのである<sup>20</sup>。

---

なにか別のものでなければならない」と述べる。これは一見すると、抑圧の過程は備給の撤収であるというその前の一文と矛盾する。しかしこれは、リピードの備給やその撤収は、Ubw 系や Vbw 系それぞれにおいてなされるということを踏まれば理解できる。フロイトは踏襲性抑圧をここで改めて、それは前意識の表象について、もしくはすでに意識的になった表象について生じる機制であり、この場合は、「Vbw 系に属している（前）意識的な備給が、表象から撤収されるというところに成り立つ」（G.W., 10 : 279 / 全、十四、二二八）と述べる。したがって、踏襲性抑圧に服した表象が Ubw 系において引き続き実効力をもつのは、Vbw 系の備給が撤収した後、Ubw 系からの備給をその表象が保持しているからであると説明される。フロイトはさらに第七章において、統合失調症患者の分析から、私たちが「意識的な対象表象（Objektvorstellung）と呼ぶことにしていたもの、それは今では、語表象（Wortvorstellung）と物表象（Sachvorstellung）に分解される」（G.W., 10 : 300 / 全、十四、二五一）という洞察を得る。意識的な表象とは、物表象と、それに属する語表象とをともに含み、それに対して無意識的表象は、単に物表象である。したがってフロイトは、「Ubw 系は、対象の物備給、すなわち初めの、本来固有の対象備給を含んでいる。Vbw 系は、この物表象が、それに対応する語表象との結びつきによって過剰備給されるということによって、発生してくる」（G.W., 10 : 300 / 全、十四、二五一）と述べる。これを踏まえて、踏襲性抑圧を改めて経済論的に正確に叙述すれば、この機制は Vbw 系における語表象への備給が撤収されることにより生じるということになる。

<sup>20</sup> 論文「無意識」の第五章でフロイトはこの箇所に続けて、『夢解釈』の考察から引き継ぐ形で Ubw 系の特徴を「無矛盾性、一次過程（備給の可動性）、無時間性、心的現実による外界の現実の代替作用（強調——フロイト）」と端的に要約する。この要約された Ubw 系の特徴をフロイト自身が詳説したのが、彼の主著である 1900 年の『夢解釈』第七章である。

以上の考察から、フロイトの無意識とは何かという問いに対しては、次のように答えることができる。第一局所論におけるフロイトの無意識とは、自我によって抑圧され意識とは区別されるひとつの心的な系である。無意識の内実（力）としての欲動のエネルギーであるが、それは欲動の〈代表〉の機能によって、同時に欲動を心的平面において代表するものからの派生物としての、〈意味〉としての表象により構成された網状組織でもある。このように、非記述的な仕方でも、かつ力動論、局所論、経済論的な見地から叙述されるのが、第一局所論におけるフロイトの無意識である。

#### 4. 無意識と解釈学的意識

本章ではこれまでの考察をふまえて、第一にリクールのフロイト解釈を参照し、フロイトの無意識の実在性の条件を検討する。第二に、フロイトによる無意識概念の構築過程をリクールの言葉で再び辿りなおすことにより、無意識と連関する「意識」概念の変容を明らかにする。そのうえでフロイトの無意識の受容による意識の変容を、直接意識から解釈学的意識への転化として示し、最後に、局所論的意識と無意識、および主体との連関を考察する。

##### 4.1. リクールによる「無意識」概念の批判的検討

前節まで私たちは、フロイトによる無意識概念の構築過程を辿り、メタサイコロジー的に叙述されるフロイトの無意識を明らかにした。夢や神経症といった事例の分析から推論され構築されたフロイトの無意識は、「無意識」という用語により日常的に指し示される意味とはかなりの隔たりをもつことが確認された。しかし同時に、フロイトは自らが構築した無意識の絶対的な実在性を主張する。私たちは、フロイトが主張する無意識の実在性をどのように理解すべきなのか。本節ではフロイトの無意識の緻密な認識論的検討を行ったリクールの議論を考察する。

リクールによれば、フロイトが無意識の実在論を要請することは疑いない。しかしリクールは、フロイトによる無意識の実在論が可能となる条件を問うことが重要であるという。

まずリクールは、フロイトの無意識は経験的な実在論であることを指摘する。「局所論によって認識しうる実在は、欲動の心的代表の実在であって、欲動そのものの実在ではない。経験的な実在論は、認識しえないものでなく、認識しうるものの実在論である」（DI, 421=1982:480）。つまり、精神分析は「欲動を代表する表象」を通して無意識を知る経験的な実在論であるため、フロイトの無意識は本質的に知られうるものである。

さらにリクールは、経験的な実在論としての無意識の「〈実在〉は『診断された』実在としてしか存在しない」と述べる。「無意識の実在は、絶対的な実在でなく、無意識に意味を与える操作と相対的なものである」（DI, 423=1982:482）。つまり、フロイトの無意識とは理論や解釈にもとづいて構成されるものである。リクールはフロイトの無意識を構成する条件をまとめて、「無意識（一般には、局所論のなかに体系化された実在）は他者によって、解釈の規則にもとづいて、実在として作りあげられる」（DI, 424=1982:483）と述べる。

まず第一に、第一局所論の無意識は「解読の規則」、いいかえればフロイトのメタサイコロジーという理論にもとづいて構成されるものである。前節で詳細に検討したように、Ubw系と Vbw系とのあいだの交通が、欲動が表象として現れる〈代表〉の機能によって保証され、規定されているからこそ、Vbw系における無意識の欲動の心的代表からの派生物を解釈

することによって、Ubw系における欲動の起源へと遡ることができるのである。つまり第一局所論における無意識は、メタサイコロジーによって規定されたBw系とVbw系との関係性においてしか定義されえない。

第二に無意識の存在は、他者の意識によって解釈されることによりはじめて意味が与えられる。他者の意識とは、すなわち精神分析家の意識である。つまり無意識は、精神分析家による解釈を通じて、間主観的な状況において構成されるのである。したがってフロイトの無意識は、孤立した一人の人間の内で構成されうるものではない。

以上を総括すれば、フロイトの無意識とは、経験的かつ構成的な存在である、とまとめることができるだろう。これはいいかえれば、「精神分析では、理論はそれが精製する事実に対して、構成的役割を持っている」（DI, 420=1982:479）ということの意味する。したがって、第二章で検討した精神分析における理論と事実の循環的な基礎づけから、フロイトが主張するような無意識の存在性の「動かしがたい証拠」を見出してはならないのである。

この無意識の限定された存在性の性格を忘れてしまうと、精神分析は素朴存在論に墮してしまふ。素朴存在論とは、もはや欲動代表の経験的な存在論でも、構成的な存在論でもなく、「終了した分析によって練り上げられた最終的な意味を、事後に無意識のなかに投射する存在論である」（DI, 425=1982:484）。素朴存在論は、無意識は思考しないというフロイトの言葉<sup>21</sup>と反して、無意識のなかに、意識の代わりとなるような思考能力とともに、想像的な現実性をも付与してしまうことになり、「無意識的な意識という観念論の怪物」（CI, 109）をつくりだしてしまうとリクールはいう。

さらにいえば、フロイトが無意識の記述的な用語法を批判したのも、それが安易に無意識の素朴存在論に墮してしまふ危険性があることを熟知していたからだといえるだろう。私たちはともすれば、記述的な意味での無意識的なものを、実体的な無意識として想像してしまふ。つまり、潜在的な意識状態を「無意識」として実体視してしまふ。それは結果として、意識されている状態から潜在的な状態に移行することができる、あらゆる表象や感情を無意識の内実として承認することになり、「無意識」概念の意味の規定を困難にしてしまふ。だからフロイトは、無意識の記述的な用語法はそれとして認めつつ、自身にとっては確かな存在性をもつ心的な系としての無意識を構築する際にはその視点を排し、力動論、局所論、経済論的な叙述を採用したのである。

#### 4.2. 直接意識から解釈学的意識へ

本稿では、第一局所論におけるフロイトの無意識を明らかにし、さらに前節においてその制限付きの存在性を承認した。主体の内部に私たちには直接的に知覚できない無意識を承認するフロイト思想は、当然デカルト主義の強烈な批判者となる。それでは無意識を受容し、意識と主体との等式が崩れ去った後に、主体と局所論的な意識・無意識との連関を、私たちはどのように捉えればよいのか。本節では精神分析における主体を主題的に考察したりクールを参照し、本稿を通じて行った無意識の考察を再び辿りなおす。ただし、本節で焦点

<sup>21</sup> フロイトによればUbw系には、「否定もなく、懐疑もなく、どんな確実性の程度といったものもない。こういったものすべては、UbwとVbwのあいだの検閲の作業によって初めて持ち込まれてくる」。「Ubwには、単に、内容がより強く備給されているか、より弱く備給されているかということしかない」（G.W., 10 : 285/全、十四、二三五）。

を当てるのは「意識」概念である。無意識と緊密な術語連関のうちにある意識は、当然、無意識概念の叙述しだいによってその意味を変える。フロイトの無意識論による意識概念の変容を明らかにしたうえで、精神分析の主体のあり方を描出するための予備考察を行いたい。

フロイトによる意識の地位の格下げ<sup>22</sup>は、第二章で考察した無意識論の展開によって示される。ここで注目したいのは、フロイトが無意識という概念を、記述的な用語として、つまり形容詞（「無意識的 unbewußt」）として用いていた段階から、システムの用語として、つまり局所論的な名詞（「Ubw」）として用いたときに生じた変化である。

記述的な意味の形容詞として「無意識」が用いられている場合、それが意味するのは、意識との関連において、無意識が〈潜在状態〉として定義されているということである。この時点で「無意識であるという質は意識に対して、まだ了解されている」。なぜなら、ここでの無意識の質とは単に、意識の中で「消えてはいるが再び現れるかもしれないものの属性」を意味するからである。知られていないものは意識の側ではなく、無意識の側にある。「無意識とは、われわれがそれを仮定して、意識から借りた指標でもって再構成するものである」（DI, 122=1982:130）。この視点はデカルト主義的な人間観とかさなり、序章で引用した国語辞典における「無意識」の第二の用例とも一致する。

しかし「無意識」が記述的概念から局所論的概念に移行したときに、観点の逆転が始まる。ここにおいて「無意識が意識との関連において定義されるのは、もはや欠如性や潜在性としてではなく、表象が宿る局所としてである」（DI, 412=1982:470）。Ubw系において〈代表〉の機能により、欲動は表象として〈意味〉の次元に到来する。まずUbw系における物表象があり、次に、それが過剰備給されることで意識的になる可能性がある。したがって「意識は必然ではなく、無意識において生起するものである」（DI, 123=1982:131）。このときそれまで〈意味〉の発生する場であった意識は「脱中心化」され、意識から無意識へと「〈意味〉の誕生の場の移動」がおこなわれる（DI, 410=1982:467）。つまりここで私たちはフロイトにより、「まだ直接意識の観点に属している記述的観点から、意識それ自体が他のいくつかの心的局所のなかの一つになる、局所論的、経済論的観点へと」導かれたのである（DI, 411=1982:469）。このとき、私たちにそれまで自明であった意識は、自身の〈意味〉を所有していないことに気づく。フロイトの無意識論を承認すること、つまり局所論的な意識と無意識を受け入れることは、私たちに直接意識を放棄させるのである。

それでは、直接意識を放置した後に、主体と意識の関係とはどのようなものになるのだろうか。つまり、フロイトによって構築された心的局所としての無意識と意識は、主体とどのような関係をもつのだろうか。これに関して、フロイトは全くの口を閉ざしている。なぜな

---

<sup>22</sup> 1900年『夢解釈』において、フロイトの意識概念の捉え直しはすでに開始されている。フロイトによれば、私たちが心的なものの由来を正しく洞察するために必要なのは、「意識という特性の過大視を見直すことである」（G.W., 3: 617/全、五、四一七）。精神分析のような呈示の方式をとった場合、「かつては全能とされ他のすべてを覆い隠していた意識」に残されている役割とは、「様々な心的な質を知覚するための一つの感覚器官としての役割に他ならない（強調—フロイト）」（G.W., 3: 620/全、五、四二〇 - 四二一）。つまり、かつては全能であるとされ、主体と同一視された意識は、フロイトによって知覚の機能にまで縮減されるのである。

らフロイトは主体と意識、無意識との関係を語る前に、そもそも主体についてさえも全く語らないからである<sup>23</sup>。

しかしながら、フロイトが明確に語らなかった精神分析における主体をリクールは、〈傷ついたコギト (Cogito blessé)〉として再構成する。精神分析の批判と挑戦を引き受けた〈傷ついたコギト〉とは、「現実の意識の不十全性、錯覚、虚偽を自認すること」(DI, 425=1982:485)によってしか、自己を措定できないコギトである。そしてリクールは、〈傷ついたコギト〉として表されるフロイト的主体において、放棄された直接意識のあとに構成される意識のあり方を、「解釈学的意識 (conscience herméneutique)」(DI, 419=1982:478)とよぶ。本節では最後に、解釈学的意識と無意識との術語連関を考察することで、リクールのフロイト解釈における主体と意識との関係を描出したい。

リクールは、局所論的な無意識概念の受容による、意識から無意識への〈意味〉の脱中心化の課題は、「解釈における〈意味〉の再開という第二の課題と切り離せない」と述べる。この直接意識の放棄による〈意味〉の離脱と、解釈における〈意味〉の再開の交替は、フロイトのメタサイコロジーの哲学的原動力である。そしてこの〈意味〉の離脱と再開の絆こそ、前章で考察した〈欲動の心的代表〉である。リクールは〈欲動の心的代表〉こそ、直接意識の「放棄」の運動が、それに対応する「取り戻すこと」の運動として、真性のコギトに比肩することを求める「意識的になること」の開始点として、意味の再充当の始まりとして現れる折り返し点であるという (DI, 416=1982:475)。

フロイト思想において無意識の欲望は、〈意味〉と〈力〉とが合体された言表である。しかしこの欲望の起源に到達するためには、言表の意識的な〈意味〉を放棄し、〈意味〉の中心を無意識へと移動させなければならない。それが〈意味〉の離脱の契機である。しかしUbw系の欲望は、それを代表する表象を解釈することによってしか理解することができない (DI, 412=1982:469)。したがってリクールは次のようにいうのである。

意識性は廃棄されることも、破壊されることもできない。たしかに、欲動の心的代表という概念が〈意味〉を帯びるのは、意識的になることの可能性、務めとしての意識化、との関連においてである。この概念は次のことを意味する。すなわち、欲動の一次代表がいかに迂遠なものであろうとも、その代表の派生物がいかに歪曲されたものであろうとも、それらはまだ〈意味〉の範囲画定に属している。それらは原則として、意識的心的現象の用語に翻訳することができる。要するに、精神分析は意識への回帰として可能である。なぜなら、ある意味で、無意識は意識と同質なのであるから。意識は、無意識の絶対的他者ではなく、相対的他者なのである (強調——引用者) (DI, 417=1982:476)。

<sup>23</sup> リクールによれば、「フロイトは、本源的な主体という問題意識に欠けており、それを拒絶している」(DI, 408=1982:466)という。それまでの哲学において主体に据えられる、意識や自我は、フロイトによりすべて欲動の分化として説明されるからである。フロイト思想において、本源的な主体としてのコギトがそのつど逃れ出てしまうことを、リクールはフロイト思想における「自我論的基礎の流出」(DI, 409=1982:466)とよび、次段落で論及する〈傷ついたコギト〉の性格として把握する。

この精神分析の回帰場所としての意識は、当然フロイトが批判した直接意識ではない。その意識は、無意識と隔絶した意識ではなく、無意識と相対的な意識、つまりは無意識と弁証法的関係にある意識である。フロイトが意識と無意識の連続性を強調したこと、そして、〈代表〉の機能が、無意識と意識の共通の構造を保証していたことが、ここで想起されるだろう。リクールによれば、「任意の意識が無意識を〈もつ〉のは、解釈学の規則に対して、また他者に対してである。しかしこの関係は、〈自分のもの〉として無意識を〈もつ〉この意識を放棄することによってのみ現れてくる」(DI, 424=1982:483)。〈自分のもの〉として無意識を〈もつ〉意識とは、〈意味〉の中心が自分自身にある直接意識のことである。直接意識を放棄することにより、解釈学の規則に対して、また他者に対して無意識を〈もつ〉のが、解釈学的意識なのである。この直接意識から解釈学的意識への転化は、リクールによれば、直接「意識の放棄の結果」としての「新たな質の意識への向上」であり、「その恩恵である」(DI, 419=1982:477)。

リクールは、精神分析の目指すところは「意識を拡大すること」であるという。今までの考察を踏まえれば、ここで意識を拡大する仕事を担うのは、解読の規則にもとづいて、他者の意識を介して、無意識にある〈意味〉を意識化する解釈学的意識であることが理解されよう。以上のことを凝縮して、リクールは次のようにいうのである。「フロイトが意図するのは、被分析者が自分にとって無縁であった〈意味〉を自分のものとすることによって、かれ自身の意識野を拡大し、よりよく生き、そしてついには、もう少し自由になり、できるなら、もう少し幸福になることである」(DI, 43=1982:40)。

以上の論述をまとめると、解釈学的意識は次のようになる。第一にその意識は、〈代表〉の機能により無意識との同質性を保証された、無意識との連続性をもつ意識である。第二にそれは、直接意識批判により〈意味〉の脱中心化が行なわれ、私のものである無意識を放棄することによる恩恵として、いかにすれば直接意識からの分離による新たな質の意識への向上としてもたらされる。そして最も重要なのは、第三に解釈学的意識は、解読の規則にもとづき、また他者の意識を介して、無意識を意識化していくことにより、意識を拡大することを目指す意識である。そしてそれこそがフロイトの意図したことであり、解釈学的意識は自分をよりよく知ることを通して、よりよく生きることを志向するのである。

以上のように導き出された、フロイト思想に含まれる直接意識から解釈学的意識への転化は、本稿における無意識概念の検討を経由することで、見通すことが可能になったものである。

## 5. 結語

本稿は、現代に到るまで私たちの人間観に大きな影響を与え続けているフロイトの無意識の特徴を明らかにするために、フロイトの第一局所論における無意識概念を、特にフロイトの叙述のしかたに着目して検討した。その結果として明らかになったのは、フロイトの無意識概念は、非記述的な仕方であつ、力動論、局所論、経済論にもとづいて叙述されるということである。フロイトの無意識とは、自我によって抑圧されることにより、意識とは区別される心的な系である。無意識の内実は、〈力〉としての欲動のエネルギーであると同時に、〈意味〉としての表象の網状組織でもある。こうした無意識における〈力〉と〈意味〉の一致を可能にするのが、欲動の〈代表〉の機能であった。

このように構築された無意識の絶対的な実在性をフロイトが主張するのに対して、本稿はリクルのフロイト解釈を参照し、フロイトの無意識は経験的かつ構成的な実在であることを示した。フロイトの無意識は、欲動の心的代表から派生する表象を通して理解可能な実在論である。なおかつそれは、フロイトのメタサイコロジーによって定式化された解読の規則にもとづいて、また無意識を解釈する他者の意識を介して構成されるのである。

以上のような無意識概念の検討を通して、本稿はフロイト精神分析における意識概念の変容を、直接意識から解釈学的意識への転化として示した。フロイトは無意識の実在を承認させることによって、私たちの直接意識を放棄させる。しかし直接意識を放棄することによって、意識はその質を向上させ、解釈学的意識へと転化する。私たちは〈意味〉の発生の場合としての無意識を、メタサイコロジーにもとづいて、他者の意識を介して意識化することによって、私たちが失った自身の〈意味〉を、欲望を再び獲得するのである。このような〈意味〉の離脱から再開へと向かう動きを体現する概念こそが、〈欲動の心的代表〉である。ここに見出されるのが、「意識的になること」という精神分析の潜在的な目的論なのである。

フロイトの無意識概念の検討にあたって、本稿はメタサイコロジー的に叙述される第一局所論における無意識に焦点を絞ったが、「フロイトの無意識」が現代においても保持している思想的影響力の一端を明らかにすることができたといえよう。「フロイトの無意識」は絶対的な実在性を主張することはできないが、一定の条件付きのもとでは私たちにその実在性を承認させる力を持っている。そしてフロイトの無意識概念の構築作業を辿ることによって、本稿は人間理解において「無意識」なるものを視点として採用する際の注意点も示すことができた。「無意識」という概念は、記述的な用法としての「無意識」（＝潜在的な意識）を実体的に転化することで、無限に多様な外延を獲得することができる。人間理解において得るものが多い概念であるからこそ、私たちは私たち自身が、あるいはその主張者が語る「無意識」の内実に注意を向け、その「無意識」概念がもつ意味の外延を認識することが重要であろう。

最後に今後の検討課題を示そう。リクルは精神分析における主体を、直接意識としての〈いつわりのコギト (le faux Cogito) 〉から、自己愛への傷あとを受け止めた〈傷ついたコギト〉へという目的論として描出する。本稿で示したフロイトの無意識と直接意識、および解釈学的意識と、フロイト解釈におけるリクルのコギト論との連関を問うことを、今後の検討課題としたい。

## 6. 謝辞

本研究は、一部、京都大学研究連携基盤未来創成学国際研究ユニットによる研究助成に基づいて執筆された。

## 7. 参考文献

[フロイトの文献]

※フロイトの文献からの引用は、以下の省略記号（版、巻：頁）を用いて引用箇所を示す。

G.W.=*Gesammelte Werke: Chronologisch Geordnet*, 18 Bde., Bde. 1-17, London :Imago Publishing, 1940-52, Bd. 18, Frankfurt : S. Fischer, 1968.

S.E.=The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud, 24 vols., James Strachey (ed. & trans.), London :Hogarth Press, 1953-73.

全=新宮一成・鷺田清一他訳『フロイト全集(全二二巻)』岩波書店、二〇〇六-二〇一二。

—*Studien über Hysterie*. In Bd. 1, S. 75-312. (ブロイアー (Josef Breuer) ・フロイト (1895) 『ヒステリー研究』芝伸太郎訳、全、二所収、岩波書店)。

—*Die Traumdeutung*. In Bd. 2/3. (フロイト (1900) 『夢解釈』新宮一成訳、全、四／五所収、岩波書店)。

—*Zur Psychopathologie des Alltagslebens*. In Bd. 4. (フロイト (1901) 『日常生活の精神病理学にむけて』高田珠樹訳、全、七所収、岩波書店)。

—*Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*. In Bd. 5, S. 27-145. (フロイト (1905) 『性理論のための三篇』渡邊俊之訳、全、六所収、岩波書店)。

—*Psychoanalytische Bemerkungen über einen autobiographisch beschriebenen Fall von Paranoia (Dementia paranoides)*. In Bd. 8, S. 240-320. (フロイト (1911) 『自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察 [シュレーバー]』渡辺哲夫訳、全、一一所収、岩波書店)。

—*Einige Bemerkungen über den Begriff des Unbewußten in der Psychoanalyse*. In Bd. 8, S. 429-439. (フロイト (1913) 「精神分析における無意識概念についての若干の見解」須藤訓任訳、全、一二所収、岩波書店)。

—*Triebe und Triebchicksale*. In Bd. 10, S. 209-232. (フロイト (1915) 「欲動と欲動運命」新宮一成訳、全、一四所収、岩波書店)。

—*Die Verdrängung*. In Bd. 10, S. 247-261. (フロイト (1915) 「抑圧」新宮一成訳、全、一四所収、岩波書店)。

—*Das Unbewußte*. In Bd. 10, S. 263-303. (フロイト (1915) 「無意識」新宮一成訳、全、一四所収、岩波書店)。

—*Jenseits des Lustprinzips*. In Bd. 13, S. 1-69. (フロイト (1920) 『快原理の彼岸』須藤訓任訳、全、一七所収、岩波書店)。

—*Das Ich und das Es*. In Bd. 13, S. 235-289. (フロイト (1923) 『自我とエス』道籙泰三訳、全、一八所収、岩波書店)。

[その他の外国語文献]

Ellenberger, Henri F., *The Discovery of the Unconscious*, Basic Books Inc., New York, 1970 (アンリ・エレンベルガー、『無意識の発見』、木村敏・中井久夫監訳、弘文堂、1980)

Eysenck, H. J., *Decline and Fall of the Freudian Empire*, Viking, United Kingdom, 1985 (H・J・アイゼンク、『精神分析に別れを告げよう』、宮内勝・中野明德他訳、批評社、1998)

DI: Ricœur, P., *De l'interprétation. Essai sur Freud*, Seuil, Paris, 1965 (P・リクール、『フロイトを読む』、久米博訳、新曜社、1982)

CI: Ricœur, P., *Le conflit des interprétations*, Seuil, Paris, 1969

[邦語文献]

池田清「リクールにおける無意識概念の検討——フロイトの〈力〉と〈意味〉の混合言語の分析——」、待兼山論叢. 哲学篇 **18**、1-16、1985

香山リカ、『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』、幻冬舎、2006

フロイト精神分析（第一局所論）における「無意識」概念の検討

久米博、「フロイトの哲学的解釈」『象徴の解釈学——リクール哲学の構成と展開——』、108-135、新曜社、1978

櫻井一成、「リクールの精神分析論——自己理解の解釈学の展開における因果性と客観性——」、美学藝術学研究 **32**、19-72、2014

兵頭晶子、『精神病の日本近代』、青弓社、2008

堀江宗正、『歴史のなかの宗教心理学——その思想形成と布置——』、岩波書店、2009